

Fact Sheet

マリー・キュリー (Marie Skłodowska-Curie, 1867-1934) —「ポーランド」が支え続けた「女性第1号」の重荷

マリー・キュリーは常に「女性第1号」と騒がれた。ノーベル賞を受賞した(1903年、物理学賞)最初の女性で、近代大学ではじめての女性博士。2回目のノーベル賞(1911年、化学賞)という快挙にいたっては、最初の「人間」である。こうした業績はマリーを、国際的な名声を獲得した最初の女性職業科学者にした。きわめつけは、共同研究者にして夫のピエールの死後、その後を継いでソルボンヌ大学の教壇に立ったことである。こうしてフランス初の女性大学教員が誕生した。このリストは延々と続けられる。

だが、これは孤独な立場でもある。というのも、「第2号」は娘の世代であり、マリーは長期にわたり、それぞれの場でいつも「唯一の女性」だった。こうした栄光には嫉妬、それも男性の嫉妬がつきまとう。未亡人となっても第一線で活躍する姿は、当時のフランスのジェンダー規範(社会・文化的性規範)からはずれていたため、マリーは誉め称えられると同時に、攻撃もされ続けた。しかし彼女は賞賛にも攻撃にも翻弄されなかった。

この「強さ」の秘密は何か。それは多分「ポーランド」なのだ。マリア・スクオドフスカ(後のマリー・キュリー)は被占領国ポーランドに生まれた。少女は被占領国の屈辱と、独立への希望を糧として育った。逆説的だが、この環境は女子教育に有利に働いた。というのも、ポーランド人は同胞の知的向上のためには、ジェンダー規範を無視することも厭わなかったからである。当時ポーランドでは、祖国の栄光につながるものとして、男性のみならず女性の知的好奇心も歓迎された。パリのソルボンヌ大学では、何とフランス人女子学生より、ポーランド人女子留学生の方が多かった。だからマリー・キュリーの立場は、フランスという点では孤独だが、ポーランドから見ればそうではない。「夫妻」で発見した元素であるにもかかわらず、その片方に、存在しない祖国の名(ポロニウム)を付けたことは、マリーの強い祖国愛と、そんな妻の心を熟知していたピエールの深い理解を物語っている。

「仕事と家庭の両立」問題も、この観点から説明できるだろう。留学後はポーランドに戻って教師になり、同時に政治活動もしようとしていたマリーをフランスに引きとめたのはピエールの愛だが、その時も科学研究の方が「祖国のため」になる、という彼の説得が効いたのだから。マリーにとって、「専業主婦」になり、教育に費やした投資を捨てることなど問題外だった。女医になって共働きをした姉もしかりである。当時のポーランド知識人にとって、自分の知識を社会の中で生かすことこそが、男女双方にとっての使命だった。

マリー・キュリーの生涯は、まさにジェンダーが社会的構築物であることの証明である。ジェンダーはその社会の求めによって変化し、「女性科学者」を支援する時も排斥する時もある。国家や民族もまた然りである。「ポーランド人」として、永遠不変の存在ではない。むしろある種の「幻想」でもある。彼女の生涯においては、一方の「幻想」が他方を圧倒し、そのことがこの女性の科学者としての才能を最大限に開花させたのである。

(裏面につづく)

Fact Sheet



マリー・キュリー 略年譜

年代	年齢	
1867年		11月7日 ロシア領ポーランドのワルシャワで、教師夫妻の末子(姉3人、兄1人)として生まれる
1878年	10歳	5月 1876年にチフスで死亡した長姉ゾフィアに続き、母が長年にわたる結核との闘病生活の後に死亡 この二人の死により、マリーはカトリックの信仰を捨てる
1883年	15歳	学年一番で中等教育を修了し、田園で1年間休養
1884—1891年	16—23歳	主に家庭教師をして、姉ブローニャと自分の学資をためる 姉は1885年にパリのソルボンヌ大学医学部に入学
1891年	24歳	11月 ソルボンヌ大学理学部に入学
1893年	25歳	7月 ソルボンヌ大学理学部の物理学学士号を一番の成績で取得
1894年	26歳	春 ピエール・キュリーと出会う 7月 数学学士号を二番の成績で取得
1895年	27歳	7月 ピエール・キュリーと結婚、マリー・キュリーとなる
1897年	29歳	国家博士号取得のためのテーマとして、ウランウムより発する謎の放射線の研究を選ぶ しばらく後にピエールもこの研究に参加 9月 長女イレーヌ誕生
1898年	30歳	「放射能」という造語と、ピッチブレンド鉱石の中に二つの新元素(ラジウム、ポロニウム)があることを発表
1902年	34歳	3月 純粋ラジウム塩の単離に成功
1903年	35—36歳	6月 「放射性物質の研究」によりフランス国家博士号取得 12月 アンリ・ベクレル、ピエール・キュリーと共に第3回ノーベル物理学賞を受賞
1904年	37歳	12月 次女エーヴ誕生
1906年	38歳	4月 ピエール・キュリーが馬車の事故で死亡、その職を継いでソルボンヌ大学の教壇に立つ
1911年	44—45歳	1月 科学アカデミーに立候補し、僅差で落選 11月 ランジュヴァン事件でマスコミに攻撃される 12月 第11回ノーベル化学賞を単独受賞
1914年	46歳	7月 ラジウム研究所設立、所長となる 第一次世界大戦勃発 傷病兵のためのレントゲン車隊を創設し、長女イレーヌと共に前線で活躍
1921年	53歳	5—6月 娘2人とアメリカの「ラジウム基金」への表敬訪問 ハーディング大統領から1gのラジウムを受け取る
1926年	58歳	10月 長女イレーヌ、ラジウム研究所の同僚フレデリック・ジョリオと結婚、ジョリオ＝キュリー夫妻と名乗る
1932年	64歳	5月 ワルシャワのラジウム研究所設立式典に主賓として招待される
1934年	66歳	1月 ジョリオ＝キュリー夫妻、人工放射能を発見 7月4日 長年の放射線ひばくによる白血病で死亡
1995年		4月 ピエール・キュリーと共に、フランスの偉人を祭る非宗教寺院パンテオンに、自らの業績によって葬られる最初的女性としてその遺灰が移葬される

(名古屋工業大学工学教育総合センター准教授 川島慶子)

(画像出典:Library of Congress <http://www.loc.gov/pictures/item/96512741/>)